

続・南蛮の風紀行長崎篇 - 3 「出島」



オランダ人には少し小さいのではと思えるベッドのある商館員の寝室。畳敷きに明かり障子、屏風（ビオンボ）と洋家具が、なんとなく可愛い雰囲気醸していました。

出島と聞いて何を思い浮かべるかは人によって違うことでしょう。それでも長崎を訪れた人なら誰でも、この小さな人口島から漂い出ていたであろう江戸時代の異国情緒に浸ることは間違いはないはずです。

司馬遼太郎が「鎖国時代の日本を暗箱にたとえるならば、長崎は唯一開いていた小さなピンホールだった」と書いています。平戸、博多、など、それまでも外国との貿易で栄えた地はありましたが、なんといっても長崎の交易地としての歴史の重みは群を抜いています。それだけでなく1639年の南蛮船入港禁止令から1854年の日米和親条約締結までの215年の間、

まさしく長崎はたった一つ、西洋に向けて開けられていたピンホールでした。しかし、子どもころに針孔写真機を作って遊んだ人ならご存知の通り、針孔であっても暗箱の中は意外に明るく照らしてくれます。外の景色を転倒した形ではありますが映してくれたりもします。

出島がそのピンホールだった時代、その穴を通して入ってきた西洋からの光は「蘭学」と呼ばれていました。その「蘭学」の光を光として日本人を照らしていたのは「出島役人」とも「通弁」とも呼ばれていた「阿蘭陀通詞」という幕府の世襲役人達です。通詞は要するに現代の「通訳」のことですが、多くの「阿蘭陀通詞」が書籍やオランダ人、中国人との直接交流などを通して、研究者・学者の域に達しており、長崎に新知識を求めてやってくる人々にとっては、今日の大学教授のような存在だったようです。特に医学・薬学・本草学・天文学・地理学などは正に鎖国という遮光カーテンによって造られた暗闇を照らす光

でした。今日の海外留学に匹敵するのが長崎留学であったわけですが、長崎でも直接外国人に接することができたわけではなく、出島役人・阿蘭陀通詞の開いていた私塾で学んでいたのです。ごく少数の医師だけが長崎港に入港しているオランダ船の船医が出島の中の阿蘭陀屋敷で診察するところを見ることができたそうです。

その長崎の大学教授の方はほとんど知られていません。歴史の地平線に顔を出しているのはコペルニクスの地動説を初めて日本に紹介した本木良永、多くの有名な蘭学者を育て



復元された商館や交易品の倉庫などはジオラマ館や史跡調査の際の出土品や諸資料の展示場などになっています。外観は和風ですが、内部は畳に直に座る習慣のない人々のための制圧空間になっています。

た吉雄耕牛くらいでしょうか。そこで学んだ弟子の方はすごいですよ。本木良永の弟子では江戸蘭学の大槻玄沢くらいですが、吉雄耕牛の方の弟子には日本人として油絵を初めて描いた司馬江漢、杉田玄白とともに解体新書を訳した中川淳庵、前野良沢、農学者の青木昆陽、大分の三浦梅園、寛政の三奇人のひとり林子平、エレキテルの平賀源内等々きらびやかなものです。

出島は海に突き出た人工島だったのですが、その後の埋め立てによる市街地の拡大に飲み込まれて、今では市街地の中、市電の走る大通りの陸側にあります。しかし長年の史跡調査と復元工事でほとんど往時の姿を取り戻しています。現在工事中の陸地側から出島に入るための正面の橋が完成すれば江戸時代の出島の姿がよみがえることとなります。島の真中を貫くメインストリートには、外観が昔の街道の宿場町に並んでいた宿屋のような木造二階建ての建物が並んでいます。建物の内部はカピタンと呼ばれていた阿蘭陀商館長の執務室や寝室、幹部が会食していた食堂などが畳敷きの部屋に洋家具を並べて再現してあります。



船医による治療の風景が再現されています。当時の日本人蘭方医には新鮮な驚きばかりの技術だったのでしょね。



通詞たちは世襲の役人で、元々は鎖国前に平戸でポルトガル語やスペイン語、オランダ語を習得した人々が幕府にやとわれて通詞となっているようです。そのため通詞は平戸組とも呼ばれることがあるそうです。

万里の波頭を超えてやってきたオランダ人たちにとっては、日本こそがエキゾチックな存在だったのでしょでしょうが、彼らが許されて長崎の街中を歩いているところに遭遇したり、交易品でもある洋家具やランプなどを垣間見た日本人にとって、彼ら西洋人の存在そのものがエキゾチックなものでした。遠く故国を離れた長崎の地で病を得て、中には故郷に思いを馳せながらこの地で亡くなった方もいたことでしょう。

長崎のまちに漂う異国情緒の成分に、当時の長崎の人々の見た異国と、オランダやオランダ領アジア各地の人々の見た異国が絢交ぜになって含まれていることを再発見した気がしています。